

時の廻廊

1 内なる海

僕は海を見ている。地球の海ではない。僕の内にある心の海だ。

朝日が上がり眠りから覚める。一日が始まる。打ち寄せる波のように時間は一瞬たりとて留まることはない。昼が過ぎ、やがて僕の海にも夜が来る。地球の海と同じように心の海も姿を変える。嵐の海。静かな海。慈愛に満ちた海。喜びに満ちた海。悲しみに満ちた海。僕の海は様々な僕の世界を映す。また、僕は思う。自分はどこから来たのだろうか。生まれる前は誰かだったのだろうか。人間とは限らない。深い海の底にすむ小さな動物だったかもしれない。植物だったかもしれない。生き物ではないかもしれない。小さな硝子だったかもしれない。僕の手には様々な破片が落ちている。

2 空白

寝転がった彼の目に、ぽっかりと小さな空が見えた。杉の木に囲まれた空に向かって、煙草の煙で輪を作って吹きあげた。煙の輪は広がって行き、やがて、消えた。もう一つ輪を作った。昭和7年3月初旬。少し寒さも和らいだと思う。家の人は満州国建国の話で持ち切りだ。難しいことは分からない。ただ、自分は数えて20才になった。来年には徴兵検査がある。7つの時にこの家に貰われて来た。10才の時に家に男の子ができた。家人の彼に対する態度は変わらなかった。それから10年、山で木を切っている。切っても、切っても、家の森林は尽きることはない。

彼の見上げている小さな空には雲がない。透明だ。水のように透明だ。彼が空白を感じた最初だった。

3 山を出す

徴兵検査は第二乙種合格だった。きゃしゃな体のためだった。さしあたって徴兵はない。家の人も小さな声で「よかった」と、肩を叩いた。彼は内心ほっとした。だが、喜びはなかった。徴兵されれば山を出ることが出来る。そんなかな思ひもあった。夏祭りに、手土産のおはぎをさげて母がやって来る。ここにきてから毎年続いていた。7つの時、四里の道を歩いて実家に帰った。草鞋は切れ、足は血まみれになった。母は泣きながら彼を抱きしめた。それ以来、夏祭りが母と会う唯一の機会だった。小さい頃は、坂道に母の頭が現れるのを何時間も待った。

今年は四つ違いの弟も一緒だった。彼はかすかに弟のことを覚えているが、弟には兄弟としての記憶はない。学業が優秀で中学に通っている。彼は尋常高等小学校卒業とは、仲の良い友達のように気が合った。二人はヤスで鮎を突いたり岩から飛び込んだりして遊んだ。岩の上で二人並んで仰向けに寝転がり、熱い夏の光を体に浴びていた。

「ここを出ようか思うて」

「兄さんは出た方がええ」

弟は即答した。

「出た方がええか」

「出た方がええ」弟はそう言うなり、身をひるがえして、川に飛び込んだ。

「出た方がええか」呟いて起き上がると、高見山がそびえていた。冬は雪。春は芽吹き。夏は緑。秋は紅葉。さまざまな高見山があった。実家への手紙には、差出人

高見山麓住民　と書いた。頭の中を空にしたかった。深い青、ブルーサファイア色の淵に向かって彼は頭から飛びこんだ。

一月後、彼は山を出た。

4 無私

行李に下着、腹巻、ステテコ、手拭を入れた。腹巻きには家の人からもらった餞別、母からの金をしっかりと挟み込んだ。残暑の激しい山道を下った。京都はもっと暑いと聞いた。不安はなかった。山にいる方が不安だった。身の置き所がなかった。二度とここへ帰ることはない。実際、彼が晩年に山小屋を建てた場所は、大和から遠く離れた滋賀県西部の村だった。

血の繋がりのない親戚が京都の本店に、嫁に行っていた。主人は法事の席で片方の尻を少し上げて放屁をし、「御免」と一言。村人はさすが大物だと感心したという。やつとの思いで京都に着いた。人の多さに驚いた。何処からわいてくるのだろうか。

市電に乗った。広い川がある。水は澄んでいるが山の川と全く違う。街並みの中を流れている。彼は不思議な場所に迷い込んだような気がした。目がさめれば、目の上に大木があるのではないだろうか。木の葉が夕日に輝き、ツクツクボウシがなき始め、家の女が、彼を呼びにやってくる。

「ごはんよ」

そこで目が覚める。

今出川で市電を降りた。料金を払うのに少し手間取った。店はすぐに見つかった。見つかるというより、店の方から姿を現した。大きな看板と暖簾。5、6人の男女が店の前で、働いていた。あるものは荷物を作り、ある

ものは荷物を開けていた。着物を着て、尻を端折っているものもいる。前掛けは全員がつけていた。〇。商店。××商店。本舗。統一されていないのが面白い。看板に花火 駄菓子 おもちゃと書いてある。彼はどんな店か知らなかった。正直、あまり関心がなかった。

近くにいる人に声をかけた。彼の實行家としての特性を垣間見ることが出来る。小林秀雄の短いエッセイに「無私の精神」というのがある。それを読んだ時、書かれた人物の無私と彼が重なった。

5 風のように

彼は最初に話しかける人を選ばなかった。一瞬の躊躇もなかった。少なくとも周りにはそう見えた。これは些細なことではない。小林秀雄のエッセイ「無私の精神」には、「御尤も」と「御覧の通り」が口癖の實行家の話がある。

少し長いが一部を引用する。

― 實行家として成功する人は、自己を押し通す人、強く自己を主張する人と見られ勝ちだが、實は反對に、彼に是一種の無私がある。空想は孤獨でも出来るが、實行は社會的なものである。有能な實行家は、いつも自己主張より物の動きの方を尊重してゐるものだ。現實の新しい動きが看破されれば、ただちに古い解釋や知識を捨てる用意のある人だ。物の動きに順じて自己を日に新たにすると是一種の無私である。―

彼を無手勝流と言った人もいるが、彼が自ら語ったこととはない。後年大きな取引先となるK商店の主人は彼との最初の出会いをこう語っている。

「ちよっと、近くに来ましたよって」そう言って、風のように入ってきた。誰も仕事の手を止めなかった。

6 出合い

「おいでやす」あちこちから声がかかる。ペコペコ頭を下げながら奥へ進んだ。

京都の家は間口が狭く、奥行きが長い。大和の家とはずいぶん違う。一段高い所にいる人が旦那さんだ。大きな顔の人だ。獅子舞を一瞬頭に浮かべた。

「旦那さん、奈良から来はった。ええっと、あんた名前はなんや」

「そうか、聞いてる。ようおこし。暑かったやろ」

笑うと、人なつこい、優しい顔に一変した。

「忠きつとん、丁稚部屋でぶぶ漬けでも食べてもらい」
奥は住まいになっていいるらしい。涼しい風が通り抜け
ていく。

「奈良のどこどす」

「吉野」

「知らんなあ。わしは山口や」

丁稚部屋は店に近い八畳ほどの部屋だった。

案内した後、忠きつとんは、さっさと帰って行った。

荷物を置いてぼんやりしていた。

しばらくすると、声をかけて、おなごしが入ってきた。

小さい女で、愛嬌があった。

「大和のどこですか」

「吉野や」

「うちは栗野」

「栗野け、栗野はわしが生まれた所や」

「名前は？」

「池川」

「池川……」

「うちは栗山」

「なんや、一里も離れてへん」

「シズちゃん」

呼ぶ声がして、女は急いで出て行った。

妻となる人との最初の出会いだった。

7 一日の始まり

音で目が覚めた。便所に行きたかったので、そつと布団を抜け出した。まだ、夜は明けていない。寝ている丁稚を踏まないように気をつけながら廊下に出た。中庭を隔てて、旦那さんが、廊下の戸を次々に開けていくのがうつすらと見えた。廊下を渡ると店に降りたのだろう。寝ている者への気兼ねなんか全くない。ガラガラガラ、ビツシャ、ビツシャ、ビツシャ。便所から出ると、こちらの廊下の戸も同じように開けて行く後姿が見えた。「えらい音やなあ。わしやったら、そおつと開けるのに」

やがて、人の起きだす気配がする。

「あれは合図かいな」

丁稚は板の間で朝食をとる。座敷で旦さんの家族が食べている。昨日の女も、末席にいる。子供の世話をしながら忙しそうだ。彼は女の横にいる。客扱いを受けているようだ。

大和の茶がゆよりぶぶづけの方がおいしいと思った。

おかわりは自由で、漬物は取り放題だった。

「30分したら出かけるよつて、着物出しといて」

「どこへ行きやす」

奥さんが聞いた。

「話が決まったらええけど、まあ、昼までにはいっぺん帰ってくる」

旦さんはそう言うのと、「ごちそうさま」と、手を合わせ、頭をさげた。

奥さんは彼の方を見て、

「あんたも仕度しよし」と、言つた。

最初に連れて行かれたのは、米屋だった。身長は五尺三寸、細い体と、二十歳という年令、丁稚には年がいつていた。

炎天の下、旦さんと肩を並べて歩いた。時々ちよろちよると旦さんの前に出た。

「ものおじせん子やなあ」

旦さんは思った。他の旦那衆なら、「田舎もんが」と、腹を立てただろう。煙草を出して吸おうとした時、彼も吸つていたのを思い出した。

「吸うか」と一本を出すと、

「おおきに、わしも持つてますよつて」

彼は、腹巻きから、煙草を出して火をつけた。二人はほとんど喋らなかつた。黙々と歩いた。それは気持ちのいい事だった。お互いが相手に氣を使うことがなかつた。

次は時計屋だった。手先は器用かと聞かれて、「大工仕事は好きだ」と答えた。「大工仕事やおまへん」と笑われた。時計屋を出る時、「うちで使おう」と旦さんの腹は決まつた。

翌朝、旦那は音で目が覚めた。戸をあける音だ。こちらの廊下にも渡つてきた。急に音を潜めて開けていく。旦さんは、枕元の煙草盆を引き寄せて、煙草に火をつけた。もうすぐ、一番忙しい地藏盆がやってくる。そして、京都の夏は終わる。思い切り、屁を放つた。横で寝ていた細君が、「はい、はい」と返事をした。

近所の人に「朝の早い丁稚さん」と評判になった。店の掃除、次に店の前を掃いた。朝焼け。京の町並みがぼんやりと浮かぶ。彼は箒をもつ手を止めて、宗教を信じているわけではないが、自然と手を合わせる。太陽が姿を見せ始める。今日も一日灼熱の火を放つだろう太陽が東山に上がり、瞬くうちに上がる。水をまく頃に、店はあわただしい音に満ちる。

骨身を惜しまず働いた。「健きつとんは、ほんまにじつとしてへん」と、周りの者が呆れた。彼は体を動かしている方が楽しかった。他人が見るとつまらない工夫でも、試してみるのが楽しい。自転車の荷台に荷物を積む時、紐をどう掛けるのがいいか、いろいろと試してみた。いちばんいい方法を丁稚賭けと、名づけて悦に入っていた。

大きな発明はない。でも、小さな発見はある。誰でも見たことがあると思う。小さな袋に、釣りの仕掛けを入れて、道系につなぐと簡単に釣りの仕掛けができる工夫。彼の発明というよりアイディアの一つである。

彼は凡人であった。働き、そこそこの財をなし、子供を育て、人からは善人と言われた。

彼は偉大な凡人であった。

9 地藏盆

地藏盆は子供たちが主役である。道端の地藏尊を新しい赤い前掛けで飾ったり、供物そなえたりする。一年間子供たちを守ってくれた地藏尊に感謝する。

莫塵を敷き子供たちがお菓子を食べながら一日中遊ぶ。福引、ゲーム、親は干渉しない。子供たちの祭である。戦後、私の家の近くでもあったが、内気な私は行ったことがなかった。行きたいとも思わなかった。

この時期、店は猫の手も借りたいほど忙しい。彼も一日中走り回った。お菓子におもちゃ、花火が飛ぶように売れた。

そして、京の夏は終わった。

10 鴨川

配達の帰り、鴨川で寝転がって空を眺める。残暑はきびしいが、空は秋だ。ふと、死を考えた。赤紙↓戦争↓死。作やんは死んだ。村で最初の戦死だった。祭りが好きで、やぐら太鼓を楽しそうに叩いていた。自分が死んだらすべてが終わる。ふいに眠気が差した。滅多に見ない夢を見た。薄暗い廊下を歩いていた。寺の廊下だ。足が冷たい。数間離れて誰かがいる。何人もいる。足を進めても彼らとの距離は変わらない。廊下の角を曲がった時、目が覚めた。鴨川の水が足を濡らしていた。立ち上がり、腰にぶら下げた手拭いで足を拭いた。自分は戦争では死なない。彼は確信した。自分の未来には、多くの始まりが待っている。

「さぼってたらあかん」

現実が彼の頭の中にあふれた。

11 吉野林業学校

直ぐ下の弟は彼と年令が4才離れていた。兄に山を出ることを勧めた6男である。彼は成績が優秀だった。

今、仲間を引き連れて、山道を自転車であがっていく。「それ行け」前方を指さし大声をあげる。彼は隊長である。三里はある山道だ。吉野林業学校は今の奈良県川上村にあった。林業は将来性豊かな産業だった。しおの峠という難所がある。この頃には汗が塩になっている。峠を過ぎると一気に下る。ススキの穂が顔をなげる。

「隊長、休憩しましょ」

「あほか、戦争に休憩なんかあるか」

仲間は自転車を放り出して大の字になる。

「ほな、五分間休憩」

彼も大の字になった。秋の空は高い。

「俺は大将になる」

彼はまっすぐに空を眺めながら、心に誓った。

12 大晦日

商家の大晦日は忙しい。朝は餅つき。昼から、男たちは大掃除、女たちはお煮しめを作る。午後10時を過ぎると、女たちは重箱にお煮しめを詰め始める。味見をしなから、旦那さんは酒を飲む。年越し蕎麦が配られる。除夜の鐘が聞こえ始めた。彼はそつと外へ出てみた。鐘の音以外何も聞こえない。降る様な鐘の音。身を切るような風が吹き抜けていく。彼は山を思い出した。母は正月の用意に忙しいだろう。明日、会える。子供のように、「おつかあ」と小さく叫んでみた。

13 正月

当時、決まった休みは盆と正月しかなかった。雨の降った日に、旦那さんが「今日は仕事にならんなあ。みんな休みよし」と言う日が時々あった程度だ。いそいそと映画に出かけるものやゴロゴロしているもの、将棋を始めるもの色々だった。彼にとって休めといわれるのが一番困った。働いたら、周りに迷惑をかける。出て行くのもおつくうだ。傘がいる。将棋を見学したり、新聞を見たり、所在なさにごろした。本はもちろん読まない。

元旦は広間に全員が集まる。旦那さんが一年の労をねぎらい、今年もよい年であるようにと話す。次に奥さん

から、旦那さんに向かって正月のあいさつをする。家族が次々にあいさつを終えると、大番頭から順にあいさつをする。丁稚では一番年長の彼があいさつをした。

「明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします」

何がおかしいのかシズちゃんがくすりと笑った。あの娘とは帰るところが一緒だ。時間をずらそうかと思った。お神酒を頂く。奥さんから、お年玉を頂く。お煮しめを食べる頃、座はくつろいできた。銚子を片手にシズちゃんが彼のそばにきた。お酌をしながら、耳元で囁いた。

「うち、10時の電車で帰るけ一緒に帰ろ」

14 帰郷 1

京都駅でほかの使用人と別れた。山口へ帰る人、九州へ帰る人、四国へと様々である。みんな新しい服を着て、抱えきれないほどの土産を持っていた。近鉄線で奈良へ帰る人は、彼としずちゃんだけだった。しずちゃんは洋服を着ていた。このころの女性としては珍しい。洋裁を習っているからだろう。おでこのしずちゃん。目が奥まるほどだった。向かい合って座った。彼は窓の外を眺めていた。しずちゃんは伏し目がちに誰もいない座席を見ている。荷物の間から、みかんが一個転がり出た。彼は急いで拾おうとする。彼女はクスと笑った。彼は拾ったみかんを手のひらで磨いて、彼女に差し出した。

15 帰郷 2

「隆さんのお兄さんと、京都で会えるやなんて思うてへんだ。隆さんと分校で一緒やったけ。池川のやんちゃ坊主いうて有名やけ。せやけど、わしは一回も叩かれたこ

とがない。お父があいつは将来えらいもんになる言うてはった」

よう喋るなあと呆れた。弟の話が長いのに軽い嫉妬を覚えた。

「一番上の姉さんが大将と結婚して、うちとはお母さんが違う。うちは後妻の子。姉さんを頼って京都に来たん。洋裁習おうと思つて。でも難しいわ。器用貧乏で才能があらへん」

彼は黙って聞いていた。何か言つて欲しいのだろう。少し間があいた。

「わしも一緒や」

「えっ？」

「器用貧乏や」

「窓を閉めよか」彼が言った。

「この方が気持ちええ。健きつとんは寒い？」

「いいや寒いことない」

窓の外には雪がちらつき始めた。

「田舎は雪が積もってるんやろか」

しずちゃんが言った。

16 帰郷3

しずちゃんと別れて、半里ほど歩く。雪が舞っていたが積もるほどではなかった。もう一つの故郷では、高見山の半分以上が雪化粧しているだろう。しばらく上がると、藁ぶきの屋根が見えてくる。坂の上で母が待っていた。

「健、帰ったか」母は涙声で叫んだ。彼は一気に坂道を駆け上がった。

農作業をするための庭がある。庭に面して長めの縁側がある。左隅には牛舎があつた。老いた牛が一頭、ゆっくりと干し草を食んでいた。物心ついた時からいた。牛

の頭を撫でた。牛は黒い大きな眼で彼を見た。

母と並んで敷居を超えた。左に土間があり、かまどがある。右は居間で囲炉裏があつた。土間で兄嫁が酒の燗をしていた。

「健ちゃん、お帰り」

「ただいま。酒はわしが持つていくけ」

「かまへん、かまへん」

「正月は女の人もゆつくりせな」

「寒かつたやろ、はよ上がり。すぐ茶を入れるけ」

母が言つた。

父と兄弟が囲炉裏を囲んでいた。

「はよ、こつちこい」

父が手招きをした。やはりここは自分の家なのだと思つた。

17 帰郷 4

「お前、栗野のしずちゃんと一緒にやつたやろ」

酒でろれつがあやしくなっている長男がきいた。

「おんなじ店やから、別々の方がおかしい」

彼は答えた。

「噂になつてるで」

長男が言つた。

「せやから、田舎もん言われるんや」

弟が言つた。正月だけは弟も、酒席に加わっていた。

「何を偉そうに。誰が田舎もんや」

長男が弟をねめつけた。

「正月早々喧嘩しな」

母が言つた。

気まずい空気が流れた。

「ぶさいくやけど、しずちゃんはええ娘や」

父が言つた。

「ぶさいくはよけいや」
彼が言った。

「ちよつとおでこなだけや」

弟が混ぜ返した。

一同が笑い、座が和んだ。いなくとも不思議な存在感が彼女にあつた。

布団の中に湯たんぽが用意されていた。懐かしい暖かさだつた。

「京都は賑やかけ」

隣に寝ている弟が声をかけてきた。

「人が多いだけや」

「それだけか」

「それだけや」

「兄やんらしいなあ」

「お前はとうする」

弟はしばらく黙つた。

「世界は動いている。おれも動かな、取り残される」
弟は天井をにらんで言った。

18 帰郷 5

「わしらが生まれる前の世界戦争はまだ終わってへんだんや。火種になつて、もつとでかいどんぱちが起こつてゐる。ドイツはヨーロッパを占領しよる。ハイル ヒットラー。ドイツにソ連もやられる。日本がアジアを守るための生命線は満洲や。アメリカがどう出るか」

「お前はよう知ってるのう」

彼は感心して言った。

「わしらはそんな時代に生きてるんや」

「よう分らん」

眠気がおそつてきた。目を閉じた。そして、つぶやいた。

「俺は戦争なんかで死にとうない」

「天皇陛下のためにでもか」

目をあけると、枕元に弟が直立不動の姿勢で立っていた。彼は黙って寝返りを打った。

19 室戸台風 1

仕事、仕事に明け暮れる毎日が続いた。でも、息抜きがなかったわけではない。京都には祭が多い。それも大掛かりだ。祭の日は仕事を早めに切り上げて、出かけて行った。春の葵祭、夏の京都祇園祭、秋の時代祭。その年、昭和9年9月21日午前、とんでもない大型の台風が関西を襲う。室戸台風である。

朝から奇妙な空の様子だと思った。曇天の高い空に雲はない。空全体が激しく動いていた。雨は降っていないかった。室町小学校に通う子供たちが彼のそばを通り過ぎて行った。荷物を積み、自転車で配達に出ようとした時、生暖かい強い東風が吹き始めた。

「台風が来てるよって、出ていったらあかん」

旦さんが店先で叫んでいた。

河原やトタンが飛んできた。木々は折れるまでに曲がっている。急いで店に入る。

「南風が変わった」

誰かが言った。

店が揺れ始めた。窓を畳で抑えた。窓ガラスが割れる音がした。

「あわてるな、みんな固まれ」

番頭さんが怒鳴った。

「つぶれへんやろか」

「大丈夫、通し柱は吉野のヒノキやハリも太いし。せやけど旦さんは何処へ行ったんやろ」

おかみさんが子供を抱いて震える声で言った。

20 室戸台風 2

台風一過。かなりの家が倒れた。室町小学校はかろうじて持ちこたえた。大阪はもっとひどかった。風速60ミを記録した。風速計が壊れたので、それ以上の風が吹いたのだろう。四天王寺五重塔と仁王門がバラバラに吹き砕かれ全壊した。死者・行方不明者3036人、負傷者1465人の大災害となった。

旦那は、蔵から出てきた。

「なるほど、あそこが一番安全だろう」と感心する声も、「何と身勝手な」、「蔵のお金が一番大事か」、「色々思ったが、誰も口に出さなかった」。

「蔵の中どうでした」とおかみさんが聞いた。

「びくともせんだ」

旦那さんは高らかに笑った。後片付けに忙しい中、彼がいないのに気づいた。

「健きつとんがいてへん。この忙しいのに」

彼は埃まみれになって夕方帰ってきた。

「どこいっとってん、この忙しいのに」番頭がなじった。

「一銭屋回ってましてん」

「なんやと、そんな小さい店回ってどうすんねん」

「得意先やし、年寄りが多い」

「おおたなまわって、どうでした、いう方が得やないか」

わしは10件も回った」

「おおたなは、つぶれてへん」

「それが商売や」

「商売は気持ちや。それにふたして儲けてもしゃない」

「風呂沸いてるで」

旦那さんが言った。

「つかれたやろ、はよ入り」
その夜。彼は一番風呂につかった。

21 小火（ぼや） 1

K商店で働きだしてから、2年が過ぎた。来年からは地方回りに出るだろう。全国を回って、注文を取る。掛け金を受け取る。注文書をK商店に送り、K商店から商品が発送される。一月に及ぶこともある。

時代祭が終わった。彼は売れ残った花火の整理をしていた。製造元に返品するためである。店から、花火を持ってきて、くわえ煙草で、板の間で仕分けをしていた。遠くで、きのきちとんの歌が聞こえてくる。

「貴女と呼ばば 貴方と答える

山のコダマの うれしさよ

貴方 何だい あとは言えない 二人は若い

「そうや、まだ、ロケット花火が倉庫にあった」

思い出して立ち上がった。確かここに置いたと思うのだが、ロケット花火がなかなか見つからない。その時、「火事や」と誰かが叫んだ。倉庫を飛び出すと、通路にもうもうと煙が上がっていた。丁稚が水を入れたバケツを持って走っていた。彼は風呂場に走った。風呂の水を汲んで走った。

幸い、消防ポンプ自動車が来る前に火はおさまった。旦那さんは、廊下に尻をぺたりと付けたまま、肩で息をしていた。

「誰や、花火の前で煙草吸うたんわ」
割れるような大声が響いた。警察が来て、彼は引っ張られて行った。小さな彼が屈強な警官に引きずりまわされる様子は、哀れだった。

22 小火（ぼや） 2

「ゴールドンバットやる。あんさん吸うてるんは」

「はい」

「吸殻があつた。それもようけあつた。あんさん、煙草吸いながら、花火触つてたんか」

「はい」

「あほかお前は」

いきなり拳固が飛んだ。彼は椅子から転げ落ちた。

「非国民やお前は」

床に血が落ちた。惨めだった。だが、自分の不注意の当然の報いだった。

「あかん、今、取り調べ中や」外から、声がした。

「ほな、待たせてもらいます」

シズちゃんの声だ。

「着替えは渡しとくさかい、帰り」

「待たせてもらいます」

「頑固な子やなあ、勝手にしよし」

下着までずぶぬれだった。

取り調べは一時間ほど続いた。三回殴られ、三回蹴られた。彼はその度にひいひい泣いた。

「今日は泊って行け」

警官がパタンと音を立てて、調書を閉じた。警官が立ちあがると、風呂敷鼓を胸にあてたしずちゃんがいた。

目は泣きはれていた。

「けんきつとん」

一言、言つて、後が続かなかった。

「旦那さん、怒ってるやろ」

静ちゃんは首を振った。

留置所で服を着替えた。部屋の中央で正座して、目を閉じた。

「けんきつとん」

シズちゃんの声が聞こえた気がした。

23 分水嶺

1935年（昭和11年）2月27日早朝の大阪駅に弟は降り立った。昨日は東京で王子製紙の入社試験があった。その帰りであった。駅には憲兵がうろろしていた。人々が噂していた。東京で大変な事件が起こった。戒厳令がひかれている。

「戒厳令で何や」

「そんなも知るか」

「知らんもんを言うな」

弟は言った。

「非常事態。常時の法律を停止し、軍隊の司令官に委任することをいう」

「軍隊が仕切るのか」

彼が問うと、

「簡単にいえばそういうこと」

インテリ―風の男が言った。

東京は雪が降っていた。一尺（30cm）ほど積もっていた。事件の詳細は分からないが、時代が急転換する予感がした。

しかし、彼が急転換した訳ではない。同年王子製紙に入社し、樺太で研修していた。朝、浜に行けば、ニシンが打ち上げられていた。ニシンを拾ってきて、寮で焼いてもらって食べた。実にのんびりとした日々を送った。たった1年だったと思う。死を考えなかった1年だったと思う。

1937年（昭和12年）甲種合格。

24 結婚

結婚式は近くの神社で行った。帰りに写真館で写真を

一枚撮った。披露宴はK商店で行った。田舎の両親が出席した。小さな披露宴だった。仲人の旦那さんが高砂をうなった。新妻の父は「伊勢音頭」を見事に歌った。合の手が「やとこせ よいやな あらら これはいせ よいとこいせ」と入る。宴は夜更けまで続いた。

新居は奈良に持った。彼の仕事は、奈良まわりだった。K商店には月に一度顔を出す程度だった。

25 入隊

1937年（昭和12年）。星一つの初年兵として、弟が奈良の原隊に入隊した。

彼は大福もちと前の週に持ち帰った洗濯物を持って、毎日曜日弟を訪ねた。水が凍りつき、靴下の洗濯は大変だったから、冬は特にありがたかった。

軍隊の訓練は厳しかった。飯は麦飯だったけれど十分にあった。だが、訓練の激しさに腹が空いた。時々、先輩が、饅頭を布団の中に入れておいてくれる。弟は、饅頭を半分食べて眠ってしまうこともあった。

26 仙台陸軍予備士官学校 1

軍人は一般兵と職業軍人からなっていた。一般兵は一般国民から、徴兵検査を経て、徴集された兵隊で、末端戦闘員である。一方、職業軍人は陸軍士官学校や海軍兵学校などで教育を受けた指揮官である。徴集兵が指揮官に就くことはあり得ないことであつた。

だが、日中戦争がはじまり、一般兵が急増し、職業軍人が不足した。それを補うために、陸軍予備士官学校令（昭和13年3月25日勅令第136号）が制定。仙台陸軍予備士官学校が設置される。士官学校の教育年数が4年を超えるのに、予備士官学校は1年足らずだった。だが、

彼らは多数の兵士から選抜された者たちだった。能力は多岐にわたっていたと思われる。

弟は試験を受け、選抜されて仙台陸軍予備士官学校に入学する。一般兵から、職業軍人と同じ道に踏み出した。

27 仙台陸軍予備士官学校 2

弟は栃木県での演習中、士官学校に呼び戻された。何事かと仙台に帰ると、参謀憲章をつけたのが5、6人いた。

「どや、前は何しとったん」

「樺太で、王子製紙に勤めておりました」

弟は、直立不動の姿勢で答えた。

「そんな堅うならんでもええ何いうてもええ。問題にはせえへん。約束する」

髭にメガネの男が言った。最も上官と思える男は黙って弟を見ていた。若い、自分と5つも違わないだろう。

「樺太には条約上軍隊は駐屯したらいかんということになつとる。あんたはどう思う」

「すべきだと思います」

即座に弟は答えた。

最も上官と思える男は、口元に笑みを浮かべた。そして、弟のほうに体を乗り出した。

28 仙台陸軍予備士官学校 3

「どんな将校になりたい」

弟の目を見て彼は言った。

「私は第一線の小隊長で、60名の部下を持ち、最前線で戦う以外は考えていません」

と、答えた。諜報の勧誘だと直感したからだ。

「第一線で戦うもいいだろう。だが、一人で千人、二千

人の働きをする仕事もある。その気はないか」

「自分は最前線で戦いたいと思います」

「そうか」

彼はふっと寂しそうな眼をした。まつ毛の長い涼しい瞳だった。

陸軍中野学校が創立される2年前、昭和13年秋の事である。

29 出征 1

昭和14年（1939年）、春。夫は相変わらず朝が早い。妻であるシズは朝が苦手だ。長男が二月に生まれてから、夜中に授乳しなければならぬ。特に朝はつらい。

夫が荷造りも、伝票も書き終えたころだ。やっと起きた。

今年、義弟がずいぶん出世して、奈良の原隊に復帰した。日曜ごとにやってくる。部下や同僚が一緒のこともあった。隣がうどん屋だったので、うどん玉を安く分けてもらい、残り物を工夫して食べてもらった。

朝ごはんの支度が出来て、シズは夫を呼んだ。

「お父さんご飯よ」

その時、玄関の引き戸が開いた。

「隆さん」

軍服姿の義弟が立っていた。

「おお、隆」

居間に入ってきた彼が声をかけた。

「上がれよ」

「いや、急ぐので。兄さん、義姉さんには世話になった。中国に行くことになった」

弟は敬礼をして、外へ出た。シズが後を追った。路地に深い霧が落ちていた。弟の背中からは、霧に溶けるように消えた。

「行つたか」

後ろで夫の声がした。振り返ったシズは夫の胸に飛び込んだ。肩を震わせて泣いた。

30 戦闘

弟は、60名の部下をつれ、山東省青島に上陸。徐州の部隊に配属され西隴海線（にしろうかいせん）の鉄道警備にあたった。60名の部下は殆どが徴集兵で初年兵が多かった。いわゆる補充兵である。戦闘はゲリラ戦で、夜になると襲撃してきた。狂ってしまう者もいた。突然鶏のまねをして、両手をバタつかせ、コケコッコーと叫び、銃弾の飛び交う中を走った。撃たれて即死した。人が次々に死んでいく。敵も味方も。「低いところを歩け。ホームの上を歩いてはいけない。軍靴を履いてはいけない。地下足袋を履け」の命令を聞かずに、軍靴をはいて、鉄砲を肩に駅のホームを歩いて撃たれた。「シナの空は広い。だから、ふるさとの山も河もみんな見えるのです。うつとりと見ていたら、パーン。一瞬に死にました。一瞬は永遠。ふるさとに帰ってください」

埋葬の後、墓標に向かって戦友の一人が言った。弟は空を見上げた。巨大な空には何もなかった。一瞬彼は深い井戸の底にいるような気がした。たった一人で。

31 夏の光

敵を捕まえという報告を受けた。彼が言う村へ連れて行った。その百姓だと言い張っていた。村人を広場に集めて、男を知っている者はいるかと聞いた。誰もいなかった。穴を掘らせた。男は黙々と穴を掘った。次に後ろ手に縛られた。穴に向かって首を出せと命じられた。N上等兵が、軍刀を抜いた。首は簡単に胴から離れた。

Nが背中を蹴る。男の体は穴に落ちた。強い夏の光の中で。

32 西安

戦闘に明け暮れる毎日だった。木陰で涼をとると、蟬の聲が、降るように落ちてくる。何かが動いた。反射的に銃を構えた。痩せた犬が、姿を見せた。狙いを定め、引き金を引こうとして、はっと我に返った。「こんなことでは」。自分を叱咤した。湿った煙草に火をつけ、大きく吸い込んだ。

青い空を見つめながら、思った。

「自分はここで死ぬだろう」

その夜、西安の軍司令部から呼び出された。

当時、西安は平穏な町だった。そこで、陸軍省付を命じられる。軍司令部に見習士官は彼だけだった。

33 ノモンハン事件

戦闘の日々から、平穏な日々に変化した。電話番や雑用が多かった。配置替えは、「あいつをあそこに置いておいたら、戦死する」という軍司令部の判断だった。

ノモンハンで戦争がおこった。満州国軍と外蒙古が、国境を巡り衝突した。実質的には背後にいる日本軍とソ連軍の戦争だった。ノモンハン事件（昭和14年（1939））である。日本が惨敗した。この事実には誰にも知らされなかった。神国は負けない。

ノモンハンに兵を派遣するための宿舎を検分するため青島（チンタオ）に行った。青島は軍港であり、風光明媚なところだった。日本軍の占領下に置かれ、日本人も多く、平和だった。この地で中学校の恩師に出会う。望

郷の思いがつのった。だが、自分は軍人である。立派になったと涙を浮かべる恩師の前でも直立不動だった。

34 帰国

昭和14年（1939年）、年の暮れ。弟がひょっこり帰ってきた。

「義姉さん」

玄関に、背広姿の義弟が立っていた。

「今、帰ってきました。一週間ほどこっちにおるけ」

その夜は、すき焼きを奮発した。弟はシナでの戦闘を喋った。

「よう、生きて帰ってきた」

兄は涙を流さんばかりだった。兄弟は杯を重ねた。シズもビールをコップ一杯飲んだ。

「明日は家に帰るけ」

「そうか、おふくろも喜ぶやろ」

「電報を打ったけ」

「それで、次はどこへ行く」

「東京に呼ばれてる」

「東京？」

「その他のことは聞いとらん」

弟の口調が少し強くなった。兄はそれ以上何も聞かなかった。長男が弟にまとわりついた。

「偉いのう、はいはいできる、はいはいできる。わしも叔父さんか」

弟は大声を上げて笑った。

35 興福寺五重塔

右に興福寺五重塔を見ながら、登大路の長い坂を自転車を押しながら、ゆっくりと上がる。今日も一日無事

に過ぎた。今日は少し早い。冬の光が鈍い曇天だが、まだ、日は残っている。今日は風呂へ行こう。もう、盥で赤ん坊は入れたはずだ。先に風呂に行つて、妻と入れ替わりに、子供をみなければならぬ。妻が帰ってきたら、袋詰めが待っている。帳面も付けなければならない。寝るのは12時をすぎるだろう。たまには、奈良公園でも連れてやりたいが。暇なのは雨の日だ。出るのが億劫になり、うどん屋の大將と将棋を打つことになる。双葉山の連勝はいつまで続くのだろう。坂の上で、妻が子供を抱いて待っていた。妻は電報を持っていた。目を泣き腫らしている。父が死んだ。彼は黙って日没を眺めていた。

36 陸軍中野学校

弟は昭和14年11月に陸軍中野学校の前身、後方勤務要員養成所に第二期生として入校し、昭和15年に陸軍中野学校の一期生として卒業することになる。

学生は語学別に分けられた。英米班、シナ班、ロシア班に分かれた。彼はロシア班を選んだ。殆どが大学出であり、中学出は数えるほどだった。特徴のある人間が多かった。英語ではかなわない。ロシア語なら、スタートは一緒だと考えた。これが運命を変える。

生活は一変した。学生に序列はなく。学校の高官も、さん付けで呼んだ。背広を着用し、長髪だった。「天皇」についても教官も交えて自由に議論した。天皇も人間である。日本の象徴としておこつ。笑いながら話した。当時、考えられない事だった。彼らを守るのは日本という国だった。それが彼らが愛した「誠」だった。「中野は語らず」榮譽も名誉も彼らには関係がなかった。成果を上げて、姿なき軍隊として立ち去る。二年三年、いや一生、その地で暮らすかもしれない。果てしない孤独に耐える力は強制で養えるものではなかった。

学校を続けるかどうかも自由だった。
年明け早々、陸軍省から、電報が回ってきた。
「チチシス。スゲカエレ」

37 通夜

通夜の朝から、酒席が続いている。近所の女たちが世話をする。男たちは飲み続ける。3、4人固まって戦争の話になった。弟は少し離れて彼らの話を聞いていた。東条英機の話が出た時、何気なく、

「わしは会った」と、言った。同時にしまったと思った。男たちの目が弟に注がれた。

「嘘じゃ。ペいペいが会うわけなかるう」

部屋中に響く笑い声をあげた。東条英機には二度会っている。小柄で気さくな人だった。「不自由はないか」と、学生に声をかけた。弟は父親を思い出した。

「酔うた、酔うた」叫んで、ゴロっと横になった。

「一杯のコーヒーから 夢の花咲くこともある」と歌いだした。

周りの者は笑った。兄は笑わなかった。歌声が小さくなり、いびきになった。兄は不思議そうに弟を見ていた。酒に酔った弟を初めて見た。衆人の前で眠る奴ではなかった。弟に何が起こっているのだろう。聞いても答えないだろう。ふと、弟が遠く行ってしまった気がした。

38 葬儀

茶碗を割る音が聞こえた。死者がこの世に未練を残さないように、使っていた茶碗を砕く。墓掘り、棺桶を担ぐもの。彼らは葬儀の後、一番風呂に入り、酒席で一番上座に座る。

長い葬儀の列は、ゆっくりと急な山道を上がってい

く。

「雪が降らんでよかったけ」

遺影を胸に母が言った。

「淋しいなるのう」

彼が言った。

「運命（さだめ）やけ」

母が言った。

「兄やん頼むで」弟が声をかけた。

前を歩いていた長男が振り返って、

「おう」と、答えた。

雪が舞い降りてきた。列は少し歩みを速めた。

西大寺で弟と別れた。再会するまで十三年の年月が流れる。その時の二人は知る由がなかった。

39 ピアノ1

学生生活も慣れてきた。給料も十分にあった。遊びの時間も十分にあった。夜は桜の木を足場に塀を超えて、新宿に遊びに行った。

友達もできた。特にTとは気があった。

「教授が遊びに來いというている。お前一緒に行かんか」

「かたぐるしい所は嫌だ」

「全然そんなことはない。気さくな人だよ」

教授の家は鎌倉にあるという。専攻は考古学。発掘現場で発見があれば全国をヘリコプターでかけつける。考古学の権威だ。

江ノ島電鉄線の窓から海が見えた。海のない奈良県で育った彼にとって、初めての太平洋だった。

「太平洋か」

彼はため息をついた

「アメリカまで続いとる」

「Ｔは言った。」

「世界は広いなあ」

彼は言った。

約束の時間より早く着いたので、大仏を見学した。

「でかいなあ」

「奈良にはもっとでかいのがあるだろう」

「でも建物に入ってる。山や空の自然の中におわす。

これは見に来てよかった」

彼は言った。Ｔも頷いた。半眼の目。静かな佇まい

だった。

「日本に生まれてよかった」

彼は手を合わせた。

39 ピアノ2

二人は坂道を上がった。教授の家は閑静な丘の上にあった。こじんまりとした洋館だった。

門をくぐると、ピアノの音が聞こえた。

「シヨパン 幻想即興曲。お嬢さんが弾いているのだろう」

教授は女性だった。男を想像していた彼は驚いた。

スラックスをはいて男のような格好だった。挨拶も握手だった。テーブルに着くと、女中がコーヒーを持ってきた。Ｔと教授は何やら熱心に議論を始めた。テーブルの上に土器の写真が何枚も置かれた。門外漢の彼は黙っていた。2階から、相変わらずピアノの音が聞こえた。教授が彼のほうを見た。

「ごめんなさい。おかしいでしょ。でも、二千年前の土器が色々と話してくれるのよ」

彼は頷いた。

「そうだわ、もうすぐ終わるから、佐喜子とお話しし

ていらっしやい」

とんでもないという風に彼は首を振った。

「大丈夫、今日学生さんがいらっしやるのは知っているから。それにあのピアノ少しうるさいの」

教授は悪戯っぽく肩をすくめて笑った。

40 ピアノ3

部屋のドアをノックした。返事はない。ピアノの音でかき消された。思い切ってノブを押した。

部屋は早春の光に満ちていた。美しい人がピアノを弾いていた。今まで会ったどの人より美しい人が。指に力を込めると、黒髪がふっと浮き上がった。白い服と、藍色のスカート。人の気配に、指が止まった。澄んだ瞳で彼をまっすぐに見た。

「私は池川隆と申します。Ｔとおじやましています」

「そうですか、私は佐喜子。次女です」

佐喜子は突然の来室に驚いた。美しい青年だった。背広を着こなし、澄んだ眼をしていた。この人の妻になるかもしれない。私はなんて馬鹿なことを考えているのだろう。彼女は自分の想像に笑った。笑顔が彼を落ち着かせた。

「シヨパン 幻想即興曲」

さつき、Ｔから聞いたところだった。

「ええ、シヨパンは好きでか」

「さつき、Ｔから聞きました」

彼は頭をかいた。佐喜子は声を出して笑った。

41 海

「海が見えますね」

「ええ、近いんですよ。丘を降りたらすぐ」

二人はバルコニーに出た。

早春の冷たい風が気持ちよかった。彼は深呼吸をした。

「夏は海水浴。沢山の人が来ます」

「海水浴はしたことがないです。海はオホーツク海、日本海、そして今太平洋を見えています」

「オホーツク海。北の海ですね」

「徴兵されるまでは、樺太にいました。とてもいいところです。朝、海岸を歩けばニシンが海辺に落ちている。それを拾って、寮のおばさんに焼いてもらうのです」

「それが朝ごはん」

「おいしいですよ」

不思議だった。はにかみ屋の自分が女性と話している。佐喜子も不思議だった。男の人とこんな風に話したことはなかった。

「海に行きましょう」

彼は言った。佐喜子が頷いた。

母に言って二人で出掛けた。誰もいない浜辺を歩いた。足跡を波がさらっていく。早春の風と光、そして海。すべてが二人のためにあった。沖合いに見える船も、飛び交うカモメも。空高く鳴く鳶も、海と出会った空も。

42 満州へ 1

満州は中国東北部の広大な土地である。1931年に大日本帝国の関東軍は独走して満州事変をおこし満州全域を占領して、翌1932年に五国共和（日本、朝鮮、中国、白系ロシア（帝政ロシア、共産主義のロシアが赤系ロシア）、モンゴル）の理念のもとに満洲国を建国した。これが太平洋戦争の火種になる。

世界は激しく動いていた。

ロシアのスターリンの独裁。中国の共産党と国民党

の対立。独裁者アドルフ・ヒトラーの台頭。第二次世界大戦まったただ中にあった。

英国を中心とする植民地政策。その手はアジアにものびていた。大東亜共栄圏の理念はアジアの独立を確保し、侵略から守ろうとするものであった。だが、五国共和も大東亜共栄圏も戦争の理屈づけだった。資源の乏しい日本は列強と肩を並べるためには資源を外に求めざるを得なかった。

43 満州へ 2

昭和15年暮、兄夫婦は大阪今里に居を移していた。さやかながら、独立していた。仲卸と言われ、卸問屋や卸売市場から商品を仕入れ、小売店に売るのである。配送は自転車だ。荷の多い時はリヤカーを引いた。利の薄い商売だが、数でこなした。特に駄菓子屋のおばさんには受けが良かった。商品を過不足なく補充してくれる。身の上相談にも乗る。あまり頼りにならなかったが、気持ちよく聞いてくれた。戦争に行った息子の話が多かった。彼にはどう仕様もない事だった。時代はどんどん悪い方に流れて行くようだった。

とつぷり暮れた道を今里の家に帰った。

息子の顔を見ると、疲れがとんだ。抱きも膝にのせたりもしないが、目を細めて無心に遊ぶ子供を見ていた。

「お父さん、隆さんから手紙が来ているよ」

「隆から……」

妻から手渡された大きな封筒を開けた。

「隆が結婚をした」

妻が急いで駆け寄った。中には結婚写真が一枚。

「諸般の事情があり、写真一枚の結婚になりました。両親には、電話で了承を頂きました。不義理をお許しください」

後に、簡単な妻の略歴が記されていた。

「陸軍省だから、忙しいのよ」

「まともな結婚ができないほどか」

「私に怒っても」

弟は何処にいるのだろう。手紙を送ったが、返事はなかった。手の届かない所に行ってしまったと、兄は思った。

44 満州へ 3

隆は満州にいた。白系ロシア人の部落で、日本人は彼だけだった。ロシア語の習得のためである。白系ロシア人は、帝政ロシアの流れをくむ人々で、反共であり、親日だった。当時樺太や北海道にも沢山いた。満洲の白系ロシア人は普段は百姓、いざというときは兵士になる。全てがロシア語の中で彼は暮らした。汚い言葉も覚えた。一月もたつと日常会話に不自由しなくなった。満洲の冬は厳しい。小便が凍る。まつ毛も凍る。だが、冬の夜空は透き通るように美しかった。星が降るというが、その言葉は、満洲の空の為にあるような気がした。

目立ってはいけない。村の保護色になるように気を使いながら、指令を待った。

45 満州 1

昭和16年早春。厳しかった満洲の冬に春の兆しが見え始めていた。弟は、満洲とソ連の国境の町、吉林省饒河（ぎょうが）にいた。饒河は満・ソ国境を流れるウスリ―河の河岸にあり、200戸ほどの集落。河幅は50㍍ほどで対岸にはソ連の歩哨の立つのが見える。小さな集落とはいえ戦略上は極めて重要な地であった。（悔いなき70年岡本等の歩んだ道（第2章6大湿原での演習）から引

用させて頂きました) <http://www.kiki.co.jp/okamoto70.htm>

彼は特務機関長で、15人ほどの部下と行動をと共にしていた。兵隊、通信兵、憲兵、朝鮮人、中国人、白系ロシア人の外人もいた。軍属（軍人でなくて軍に所属する文官・文官待遇者など。）も行動を共にしていた。関東軍の情報部員であり、独立した組織であった。下士官が佐喜子の訪問を告げた。彼には予期しない妻の行動だった。

46 満州 2

満州 2

「少しここにいてから、お帰りなさい」

夫婦といっても、ほとんど一緒に暮らしたことがなかった。言葉遣いも他人行儀だった。

「帰りません」

佐喜子がはつきりと言った。

「厳しいところですよ。冬は全てが凍る」

佐喜子は彼の目を見ながら、黙って頷いた。

「ここは戦場です。とても危険な場所です。あなたのようなお嬢さんが暮らすところではありません」

「私は軍人の妻です」

佐喜子は毅然として言った。

二人は、ウスリー河を歩いた。

「川の向こうがソ連です」

要塞が途切れ。ソ連の歩哨が立つのが見える。

「はい、日本は戦争をしているのですから。私は鬼にもなります。耐えられますか？つらいですよ」

二人の上を名も知らない鳥が飛んだ。二人が空を見上げた。真っ青な空だった。佐喜子の手がそっと彼の手に触れた。

「悲觀的なことばかり言っているも仕方がないの」
彼は快活に笑った。

47 灰色の風景

兄は大阪の今里に移った。製造屋から、仕入れ、小売りに卸す。妻は、家で小さな小売りをした。2才の長男とお腹には子供がいた。

街は戦争色が次第に濃くなっていく。米が配給制になり、外食券制が実地された。

男達は次々に出兵していく。何時赤紙が舞い込むかわれない。30才近いし、大丈夫だと夫は言うが。それと、戦争に行っていないことが引け目に感じられた。街は派手な色が消え、灰色の風景になった。

48 満州 3

佐喜子は軍属の人と、電話番号や事務の仕事をしていた。夫は、一度出かけると、何日も帰らないことがあった。仕事の中身は分からない。土色の顔をして帰ってくることもあった。彼らは一団となって行動することもあったし、2、3人に分かれて行動することもあった。

1941年6月22日：独ソ戦開始。独軍がソ連を奇襲し独ソ戦が開始した。ドイツが優勢で、毎日のようにソ連の逃亡兵が国境を越えて満州に逃げてくる。彼らを調べるのも弟の仕事だった。しばらくすると逃亡兵の中にスパイが混じり始めた。ますます厳しく取り締まらなければならなかった。監獄に入れてあったスパイが脱走した。すぐに国境を封鎖。追いつめられたスパイは、自害して果てた。弟は自分の未来の姿を思った。彼の亡骸に手を合わせた。広大な満州に夕日が落ちていった。

49 12月8日

11月に次男が誕生した。女ならよかったのに。女なら、戦争に行かなくてもよいから。口に出さなかったけれど、妻は思った。

昭和16年12月8日午前7時すこし前に日本放送教会が臨時ニュースで「大本営陸海軍部12月8日午前6時発表。帝国陸海軍は今8日未明、西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」と太平洋戦争開戦を伝えた。第一回の大本営発表であった。

大本営陸海軍部発表（十二月八日午前六時）

<http://jseagull.blog69.fc2.com/blog-entry-488.html>

兄夫婦は食事中だった。

「アメリカと戦争が始まったん」

妻が言った。

隣から、「やったぞ」という歓声が聞こえた。

「戦争に引つ張られへんやろか」

「しっ」

彼は唇に人差し指をたてた。

50 長男誕生

昭和17年春に長男が生まれた。佐喜子は日本に帰らなかった。「満州は日本です」と言った。特務機関長の妻としてやらなければならない仕事もあった。軍属や、兵隊、外国人、さまざまな人間がいた。佐喜子はそれらの人々の摩擦に気を配った。中国人の陳さん夫婦とは仲がよかった。長男と同じ頃に長女が生まれたということも

あって、色々子供のことと話をした。言葉は十分に通じなかったが、共通の話題が豊富だった。長男は、戦時下に関係なく、満州の大地に抱かれるようにすくすくと育っていった。

51 召集令状

商売を続けることが出来なかった。製造屋が材料不足から、次々と店を閉めた。彼は軍事工場に働きに出た。

昭和18年6月1日、召集令状がきた。奇しくも妻の誕生日だった。父親が布施の家にきている時に、空襲警報が鳴った。一目散に防空壕に走った。父は「こんな所に置いとけへん」と、疎開を促した。しかし、帰る家は自分の実家ではなく夫の実家だった。昭和19年2月、夫の実家に二人の子供を連れて疎開する。肩身の狭い生活が始まった。

52 ソ連侵攻

昭和二十年八月九日未明。開戦。弟は国境の町 饒河^{りようが}にいた。ソ連機が一斉に国境を越え、満州に侵攻した。国境を越えて直角に入ってきた。最初に監視台が爆撃された。誰の目にも、戦争が始まったのは明らかだった。二月に心配があった。六月には国境の直ぐそばでソ連軍の不穏な動きがあった。弟は報告もあげていた。戦闘部隊ではない、弟たちは知らなかったが、開戦より前に密かに、軍は南下していた。

開戦時は朝鮮半島に接する吉林省に南下して、持久戦に持ち込むという戦時行動計画があった。弟たちはそれに従って吉林を目指して南下していった。途中、陳さんの娘が空爆に巻き込まれた。子供は空中で消えた。何も残らなかった。佐喜子は呆然と立ち尽くした。血が一斉

に下がり、ぎらつく太陽が視界を赤く染めていた。

「どうして」

「どうして、なぜ、なぜ、なぜ」

佐喜子は這いつくばって、熱い満州の土を爪で引っ掻いた。

53 別離

後方へ下がる軍隊が、橋を落としていった。弟らは川を渡らなければならなかった。日本がつくった軍用道路をソ連が追いかけてきた。四日目にはソ連軍が彼らを追い越してしまった。目の前で戦闘が繰り返された。弟らは川の中州にいた。八月十四日、弟は特務機関長として決断を迫られていた。戦闘部隊ではないが、これ以上軍属と行動を共にするのは不可能だった。共倒れになる。軍属はここに置いていく。避難民として行動せよ。自分らは兵隊を連れて吉林を目指す。佐喜子は黙って聞いていた。

「大きくなったら、ロスケ（ロシア人の蔑称）をやっつけろ」

数えで三才の息子はしっかりしていた。父親の目を見て。

「はい」

と、応えた。彼は妻に水筒を渡した。子供はのどを渴かす。佐喜子の腹の中に子供が宿っていた。

「それでは行くぞ」

分かれようとした時、佐喜子は

「武運長久をお祈りします」と言った。

それが永遠の別れになった。その年の十二月十日、長男は死亡。詳細は分からない。翌年の四月二十日ハルピンへ向かう、貨車の中で次男が誕生するが、すぐに死亡。夫の一字を名づける。数えで一才。死んだ子供を抱いた

まま、佐喜子は日本人が集まっているハルピンの花園小学校に着いた。食べ物、飲み水にも困る劣悪な生活だった。ロシア人の兵隊が襲ってくることもあった。そこで六月一日まで生きた。二階へ上がる階段の途中で死んだ。これらは弟が日本に引き揚げてきて初めて知ったことだった。十年の歳月が流れていた。

54 逃避行

吉林への旅は長い。野営には火を欠かせなかった。ほん側まで狼がやってきた。隊を進めるにつれ、別の隊や落ちこぼれた人々が入ってきた。人数はふくれあがった。人は眠らなければならぬ、人は食べなければならぬ。そんな宿命が悲しかった。腹は減った、立ったまま眠気が襲った。食料を奪うために、「殺すな」と、彼は言った。残してきた家族が同じ目に遭うかも知れない。ソ連軍の牛を盗んだこともある。牛殺しを生業にしていた者がいた。解体を生業にしていた者もいた。牛を焼いてみんなに分けた。一部食べて、他は保存食にした。道は果てしなく長い。時々銃撃もされた。多分民間人だろう。

戦争ではないのかも知れない。逃避行だと彼は思った。ただ逃げる。生きるために。妻や子も逃げて欲しい。生きるために。そして、いつか会おう。

ピラがまかれた。「戦争が終わった」。敵の謀略だと思った。日本は吉林で持久戦に入るのだ。弟は、そう確信していた。

55 終戦

「男は殺され、女は外国に売られる」
噂が小さな村にまことしやかに囁かれた。シズは実家

に走って行った。

「お父さん、村の人が言うてることほんとけ」

「心配するな日本が無条件降伏したのだから皆が言うようなことはない。賢もすぐに帰ってくる」

土間で藁を打っていた父は言った。

次々と兵士は帰還してきたが、父の言葉に反して、夫は帰ってこない。不安がよぎる。夫が帰ってきたのは十月の末だった。やっと戦争が終わった。次に「生活」という戦争が待っていた。京都のK商店の親方から、忠きつとんと三人で会社をつくらないかと連絡があった。京都は空襲も殆どなかったらしい。一家で京都に行くことにした。彼は北海道を任された。とにかく働けるのが嬉しかった。翌年七月、三男が生まれた。「また男け」。彼は一目見て、直ぐに仕事に行ってしまった。妻は自分で名前をつけた。満州でも自分で死んだ子供に名前をつけた女がいた。遠く離れて、その子が蘇ったのかも知れない。もちろん、シズは知るすべもなかったが。

56 吉林

吉林に着いたのは11月であった。殆ど冬になっていた。彼の元に日本人の満鉄駅長がやってきた。

「戦争は終わりましたん」

「終わった」

「日本は無条件降伏しました。関東軍も収容されてます」

信じられなかった。

「町に出ていこう。嘘なら、その場で殺す」

駅長を人質に町に出た。日の丸と思って見た旗も、よく見れば韓国の旗だった。

「俺は特務機関だ。どうすればよいと思う」

駅長は黙っていた。

「駅員に紛れ込めないか？」

「それは無理です。シナの自衛団が人数をきっちり把握してます」

隊に帰った彼は、

「ここで特務機関を解散する。それぞれ思い思いに行け」

と、言った。武装を解き、自衛団に渡した。彼は一人で、飛行場をつくる航空部隊に偽名で紛れ込んだ。ここなら、彼を知る人間はいないだろ。

極寒の中、ソ連本土まで歩いた。汽車に乗せない。ロシア兵の言っていることは理解できた。昭和二十二年頃に刑法が廃止された時期がある。丁度その時期に彼の身分がばれた。

収容所を渡り歩くうちに、

「あいつは特務機関におった奴や」

と、密告する者がいた。初めは白を切っていたが、目をつけられるとばれるのは早かった。

呼ばれていくと満州時代の写真までが揃っていた。即、ハバロフスクの監獄にぶち込まれた。

57 シベリア抑留

地下百メートル程の穴で金を掘る作業だった。よく働いてパンを二個もらうより、出来るだけ働かずにパンを一個もらう方が生き延びられた。体温計に工夫して、仮病になった。脇の下で上手に擦るのだ。三十七度を少し超えるところまであげる。労働は免除される。

看護婦は簡単にだませた。だが、度々になると、医者

の所に連れて行かれた。

「たいしたことはないな」

診察もせずに医者は言った。彼は見抜かれたと思った。仕事をしたら死ぬ」

正直に言った。医者は黙って彼の目を見ていた。医者の処方は当分「希望食」だった。ご馳走が続いた。医者はエストニア人で、彼もスターリンの暗殺計画に加わった囚人だった。

「お前の田舎はどんなところだ」

医者は聞いた。

「山深いところだ。美しい川もある。四季折々の花が咲く」

医者は目を閉じて聞いていた。

「日本か、行ってみたいな」

また、ある日はこんなことも言った。

「人は生まれた限り、生きる権利がある。そう思わないかい」

彼は医者が終身刑であることを知っていた。

看護士（彼も囚人である）が不寝番で見回る。彼は廊下に座って医師の巡回を知らせる。眠っていた看護士が急いで起き上がり、巡回していたように装うのだった。

彼のいたのは結核病棟で人がよく死んだ。

「おい、日本人、手伝ってくれ」

担架の片方を持って、死体置き場まで運ぶ。死体置き場には力チン力チンに凍った死体が山積みになされていた。死体を溶かして、解剖するということだった。子供も多かった。

58 独立

大阪で商売をすることになった。玉造に六十坪ほどの土地を買い、家を建てた。鶴橋にも、松屋町にも近い。昭和二十四年八月二十三日に引越した。養子先の家から、トラック一杯の材木が送られてきた。代金はいらなうと言ったが、「これはこれと」と彼は代金を払った。

彼には一国一城の主という力みもなかった。「商売は

牛のよだれ」。途切れることなく、少しずつ。駄菓子を中心にした。良心的な製造屋が集まってきた。家内工業だが、彼を信用していた。仲卸も店にやってくる。家で
の商売と平行して、他県に出て行き、商売をした。トラックに商品を載せ、神戸、姫路、京都へと出かけて行った。番頭が二人、丁稚が三人と増えていった。シズは女将さんと呼ばれ、彼は旦那さんと呼ばれた。朝から晩まで働きづめの毎日だった。ひどい雨が降った日だけが休みだった。

二十五年にジェーン台風が来た。瓦が乗っている家が少なく。彼の家が避難所になった。息を潜めて台風が通り過ぎるのを待った。

風の音を聞きながら、彼は弟のことを思った。日本人抑留者のほとんどは、昭和二十五年の前半までに帰国した。帰国者が新聞に載ると、何度も何度も、名前を辿ったが弟の名前はなかった。

風が止み、外に出ると殆どの屋根が吹き飛ばされていた。四男がその年の十一月二十日に生まれた。結局子供はみんな男だった。

59 恩人

目の前にエストニア人の顔があった。

「助かった」

彼はいつものように素っ気なく言った。記憶が蘇ってくる。風呂場で心臓に熱湯が入っていくような痛みを感じた。それからの記憶はない。肺炎だった。パンが喉を通らない。生き延びたのは紅茶だった。パンと紅茶を交換した。紅茶ばかりを飲んで過ごした。医師は彼に何くれと面倒を見てくれた。医師は命の恩人であり、親友だった。国境を越えても人は分かり合える。心底そう感じた。そこに二ヶ月ほどいた。噂で日本人は殆ど引き上げ

たと聞いた。ハバロフスクの監獄に集められた。彼も病気のため二カ月遅れてハバロフスクに送られた。

60 日本からの議員団

日本から、社会党の議員達がやってきた。女性もいた。ロシア人が耳をそばだてていた。女性議員が言った。高良とみである。

「言いたいことを紙に書きなさい。それを私のポケットに入れなさい」

それぞれが書いた。

「わしは生きている」

その中に国に知らせてくれという一文がある。全員の一致した意見だった。

「我々の処置と引き替えに国益を損じるよう事は絶対無いように。我々はこの地で命を落とす覚悟でいる。抑留者全員」

結果的にはこの意見書は国に伝わることはなかった。

61 ハバロフスク事件 1

昭和三十年の暮である。殆どの日本人抑留者は帰国していた。残されたのは元憲兵とか、特務機関員とか秘密の通信業務に従事した者などは、特別に戦犯として長期の刑に服し、ハバロフスクの収容所に集められていた。弟もその一人だった。中野の出も沢山いた。彼らが「無抵抗の抵抗」を旗印にハンガーストライキを起こした。いわゆる「ハバロフスク事件」である。

収容所の全員が仕事に行かない。真っ裸でベッドに寝たままだった。

「これ以上働いたら、死ぬ。モスクワの偉い奴を呼べ。モスクワは分かってくれる」

武装した兵隊と非武装の大男がやってきた。大男が一人ずつ、バケツリレー式に裸の日本人をトラックに放り込んだ。監獄へぶち込まれた。次に断食で抵抗した。先にパンを隠しておいて、少しずつ食べながらの抵抗だった。激しい抵抗だった。命を落とした人もいる。

62 ハバロフスク事件 2

餓死を収容所側は恐れた。そして、最終手段に出た。小さな日本人が連れて行かれ、口を開けられ、無理矢理に流動食を流し込まれた。これには参った。気管に入ったら、死ぬだろう。断食は中止せざるを得なかった。

モスクワから中将クラスがやってきた。こちらは中野で固めた。でかい図体のIが代表になり、弟は防衛隊長になった。Iは待遇の改善を直訴した。

収容所に戻り、ハバロフスク事件は終わった。待遇は大幅に改善され、仕事を強要しなくなった。弟は売店をつくった。売店に品物が置かれた。只ではない。代金を取られた。「希望者は仕事をしてもらいたい」という奇妙な告示が出た。半数ずつ仕事に出た。重労働はなく、楽な仕事だった。党学校の建設であった。受刑者の中には、一級建築士から左官まで様々なエキスパートがいた。彼等とソ連側の建築士が話し合い、工事を進めた。出来上がった党学校は現存している。立派な建築物だという。翌、昭和三十一年一月二六日に最後の引揚者千人余が帰国した。

63 商売繁盛

商売は軌道に乗ってきた。仕入れてきた駄菓子やビニール袋に小分けして、箱詰めをする。くじをつける。いわゆる「当てもん」である。くじも工夫した。竹のおみ

くじとして、箱に印刷した線と合わせて、一等、二等を決める。落花生も当たった。殻つきが珍しく飛ぶように売れた。小さなおかき「星の光」は病みつきになる美味しさだった。

「隆が帰ってくる」

電報を持ったまま、彼は立ちすくんだ。

64 舞鶴

「日本が見えたぞお」

誰かが言った。甲板に人が群がった。それから失われた時間を埋めるように、人々はまんじりもしなかった。とうとう帰ってきた。冬の舞鶴がくつきりと見えるようになった。弟も人垣をかき分け、先頭に立った。人の顔も見える。中に、彼の名前を書いた旗を見つけた。兄達がいる。弟がいる。だが、妻の顔はなかった。

港で抱き合った。兄や弟は泣いた。だが、彼は泣かなかった。妻や子供のことも聞かなかった。聞くのが怖かった。

65 時の廻廊

神社の前で車を降りた。ここからは歩いて帰ると言った。ガリガリに痩せて、足下がおぼつかない弟を心配したが、ゆっくりと歩き始めた。都会の変容に比べてふるさとは少しも変わらない。神社に無事帰還の報告をした。母が坂道を転がるようにやってきた。弟の首に抱きつき、ひたすら泣いた。弟は母の背中を優しく撫でた。

まず仏間に入った。仏壇に見覚えのある水筒があった。満州で妻子と別れる時に渡した水筒であった。帰国後一度も泣かなかった弟は畳に顔を擦りつけて泣いた。

仏間に入ろうとした兄は弟の様子を見て、静かにふす

まを閉めた。

「時の廻廊」了

平成20年8月10日（日）